プリンセスリバーシ!!
交錯する美姫と魔姫

舞麗辞
挿絵／昼沖太

あとみっく文庫
005

あとみっく文庫／PDF立ち読み版

CHARACTER

リリス
Lilith

シルヴィアと共に魔王退治に参加するツインテールの悪魔っ娘。自由が欲しいと意味深なことを言うが……。

シルヴィア＝ラヴィ＝レイゼント
Princess Sylvia

レイゼント王国第一王女。わがままぶりが典型的なお姫様。軽はずみな行動で魔王を復活させてしまうことに。

シェリー
Sherry

エルフの女性。思い込みが激しく計算高いところも。

無抵抗な下半身を持ち上げられ、下穿きが膝までずり下げられる。リリスの容姿が幼げだからか、エルフたちはこぞってお姉さん口調だ。
「ば、ばかにしてぇっ、これでもあたし三百年以上……ひうぅっ!?」
怒りの言葉も黒衣越しに乳首を摘まれ悲鳴と化した。身体は全然言うことを聞かないくせに、与えられる刺激だけはしっかりと伝えてくる。
「はぁい、お股おっきく広げちゃいますよぉ……あらやだこの子、生えてないのォ？」
「あっははは、ほぉんとだ♥　でもこんな赤ちゃんま○このくせして、いっちょまえに濡らしてるみたいじゃない」
暗示により理性のたがを外されたエルフたちはリリスの秘所を覗き見るや口々にはやし立てる。言うまでもなく、これほど多くの相手に無毛の恥部を観賞されるのは初めてのことだ。恥辱で頭に血が上り、色白な頬も真っ赤に染まる。
「うう…うるさいっ、うるさいうるさいうるさぁぁいっっ!!」
逃げることも抗うことも、耳を塞ぐことさえできない。大声で喚き散らしても自らの恥辱を肯定するばかり、屈辱にまみれる魔少女に、更なるエルフの魔手が迫る。
「おっぱいのほうだってほぉら、こんなに硬くしちゃって」
エルフの細い指がくりくりと乳首をくじる。
「くぅっ、勝手に触るなぁっ！」

払いのけたくても当然腕は動かない。すぐ目の前にあるのに、まるで他人のもののようにピクリともしなかった。

なのに指腹で圧迫されると刺激に乳首はビクビク疼き、恥ずかしいくらいあからさまに勃起を始めてしまうのだった。

「そうだ、アレ、持ってきましょうよぉ」

「えー、アレェ？　あなたってば、あいかわらず鬼畜ねー♥」

「んふっ、でも面白そう……わたし持ってくるわ！」

エルフの一人の提案に、妖精族の娘がこぞって怪しい笑みを浮かべ、そのうちの一人が踊るようにして持ち場を離れた。

「な、なによ…アレって……ねえ、もったいぶらずに教えなさいよ……？」

周囲の反応に戦々恐々としながら聞きまわるリリスだが、皆ニヤつくだけで答えない。そうしている間にも消えたエルフは舞い戻ってきた……その腕に、西瓜ぐらいの大きさの古めかしい壷を抱えて。

「ふふふ、覚悟なさい……コレ、ホントに凄いんだから」

言いながら、エルフは壷の中に手を差し入れた。そして中からドロリとした水飴みたいなものを掬い出す。蘭を煮詰めたような、甘い匂いが鼻腔を掠めた。

とろおぉぉぉ……。

琥珀色の液体を絡ませた妖精族の娘は、もったいをつけるようにゆっくりと、それをリリスの胸元へと垂らす。
「ひゃっつめた…えっ、熱うっ!?」
触れた瞬間ひやりとしたのに、すぐさま皮膚がチリチリ焦げる。未知の感覚に戸惑う紅眼を覗き込み、彼女を囲む娘の一人が口を開いた。
「凄く感じちゃうでしょ？　私たち妖精族に伝わる香油よ……性感用のね」
「コレを塗られたら最後、全身おま○この超ビンカン娘に大変身なんだから♥」
クスクスと笑いながら娘たちはこぞって壷へと手を差し入れ、粘液を掬い取っては魔少女の四肢へとそれを塗りつけてゆく。
ぬりゅっにゅりゅりゅりゅうぅぅ……。
「フンッ、誰がこんなもんに感じてなんか……ひゃはぁぁぁ!?　こらっ、やめなさいよ、こんなことしたってねぇっ……ひぅんっ、そ、そこっ……う…わ、あ……くぅっ」
気丈に振る舞おうとしたものの、一斉に身体中を這いずり始めた白い指に、一気に声は艶めいた。恥ずかしい声を抑えるように、濡れた唇を閉ざしギュッと奥歯を噛み締める。
（ほっ、ほんとにこれぇっ…身体中が…凄く敏感になるっ……こんなのってぇぇっ!?）
エルフの指に擦られるたび、意志とは無関係に頬が弛緩し淫らな微笑を浮かべてしまう。
シェリーの用いたキメラの羽さえ今となっては生ぬるい。薄皮を剥がれるとか、神経を

研ぎ澄まされるとか。もはやそんな次元ではないのだ。
まさにエルフの一人が囁いた通りだ。香油の塗られた皮膚が、そのまま性器に造り替えられてゆく。触れられたそばから、皮膚の感覚が粘膜質のそれへと書き換えられてゆく。
「ふくぅっ……んっ…ふぁあっ、あっあっはぁぁ……」
硬く噛み締めていた奥歯から力が抜け、再び唇から甘い吐息が漏れだした。内股をなぞられるだけで膣口がぐちゃりと音を立てて綻び、指先を舐められれば淫核をしゃぶられたような喜悦が突き抜けて子宮を痺れさせてゆく。
（きっ…きもちいいぃっ…きもち、よすぎ……ずるいわよっこんなのぉぉぉっ!!）
こんなことされて感じたくなんてないのに。妖精族の執拗な肉按摩（あんま）を施されると、四肢の指先から火に炙（あぶ）られた飴みたいに甘く柔らかく蕩かされてしまう。
「アハハッ、何百年も生きている割には、ほんと子供みたいなおっぱいねぇ。ほぉら、アタシがマッサージしたげるから、頑張って大きく育ちなさいよねぇっ」
むにゅるっ、にゅむっ、ぬりゅむにいぃっ。
「はぅっ…お、大きなお世話だっての……勝手に…触んないで…はぅ…んっくぅぅ……」
黒衣の胸元を曝け出され、幼乳を力いっぱい圧搾される。オイルのおかげで握り潰される前ににゅるんと掌から滑り抜けるものの、そのたび勃起乳首を激しく弾かれ、心臓が止まりそうなほどの快感が迸（ほとばし）った。

乳悦に打ち震える魔少女の艶姿に、他のエルフたちも責め手を強める。
「可愛い声出しちゃって……ココなんかはどうかしら」
ぬるるるるるるぅぅぅぅっ。
「うひやあああぁぁっっっ⁉　だめっシッポはホントだめ……あっ、うそ！　シッポ別にだめじゃないっ、全然だめじゃにゃひいっぃぃぃぃんっっっ♥」
シルヴィアに襲われた時と同じ轍を踏みかけ、どうにか取り繕おうとするリリスであったが既に後の祭り。弱点を握られた魔少女は、またも尻尾を重点的に責め立てられる。
「ひゃめ…あひっひんんうっ、んあぁっ…ふひゃあぁぁぁ……‼」
にゅるりにゅるりと根元を扱かれつつ裏筋をツツツッと舌先で舐め上げられると紅い瞳が一段と潤みだす。やじり形の先端部分をあ～んっ、と一口で咥えられ、はむはむと甘噛みされながらちゅうちゅうと吸い付かれれば紅潮した頬がぴくぴくと痙攣を繰り返し、濡れた唇はひっきりなしに牝の甲高い悲鳴を奏で続けた。
（おっお腹に響くぅぅぅっ……いやぁっ、お尻までっ……疼き始めてるぅぅ……‼）
尻尾を苛められるたび、尾てい骨に鈍い疼きが広がって小ぶりなヒップがぷるぷるっと震える。雪色だった桃肌はいちご水を染み込ませたように淡いピンクに色づいて、甘酸っぱい果汁のような汗の玉を艶やかな肌にいくつもいくつも転がせた。
「うふふっ……シッポをシコシコするたび、オシリの孔キュッキュッて窄ませちゃってか

ーわいいっ♥」

つぷっ。

リリスの股間を覗き込んでいた妖精族の娘が、躊躇うことなく排泄孔へと指を捻じ込む。

「かはっ⁉　はひぃいいいっ…ひやぁっはいっ入るなっお尻はいってくるなぁぁっ‼」

途端に桃色の閃光が直腸から喉元までを一閃し、リリスは一瞬呼吸が止まる。

ぬぷぬぷぬぷっ……魔少女の反応にもかかわらず、香油を纏った指先は驚くほどあっさりとその根元までが黒衣の少女の直腸へと飲み込まれていった。

「あらぁっ⁉　この娘、後ろ初めてじゃないみたいよ⁉」

指を捻じ込んだエルフが意外そうに、しかし同じくらい嬉しそうに声をあげた。

「ほんとぉっ⁉　こーんなにかわゆいアナルのくせして、経験済みってワケ⁉」

「じゃあ当然前も開通済みかぁ……ちぇっ、せっかくアタシがこの子の初めて、いただいちゃおうと思ってたのにぃっ」

くちゅっ。エルフの一人が舌打ちをしつつ、魔少女の股座（またぐら）を覆うように掌をあてがった。

「まあいいわ、そんなオマセさんなら……いきなりこれも大丈夫よねッ♪」

ぐちゅぬぷぷぅぅぅっっ‼

「きゃひぃぃぃんっっ⁉」

人差し指と中指、それに薬指を加えた三指が一気に膣道を貫いた。エルフの指は人間と

比べて細いので圧迫感はそれほどでもないが、代わりに常人離れした長さでもって爪先が子宮手前まで潜り込み、リリスは堪らず馬のようにいなないた。
「あらぁっ、膣内はもうトロトロじゃない……フフッ、イヤイヤ言っておきながら、ホントはとっても感じちゃってたのね？」
「ちがっ、感じてなんかないっあたひぃぃぃっ、ひゃめっ、ゆっゆびはやすぎぃぃ‼」
にゅぷっぬぶっじゅぽっじゅぽっ‼
魔少女の反論を説き伏せるように、エルフは突き込んだ指を激しく出し入れし始める。膣粘膜を擦りたてられると甘い快感が下腹部で溜まり、指先が子宮口を打つたび腰骨がじんわりと痺れを帯びた。刺激を受けた肉壷内部ではじくじくと蜜が滲み出し、エルフの指に掻き出されトロトロ零れて会陰を伝う。
「それじゃコッチも本気で苛めちゃおうかしら」
ぐにっ、ぬぽっ、ぬぐぷぅぅ……‼
桃孔をほじっていた指も抜き差しを再開させた。人差し指と中指でもって螺旋（らせん）を描くようにして直腸を掘り返されると、途端に腹中をジンジンと鈍い疼きの波紋が広がる。
「ふっ…くぅぅんっ……おっしりぃぃっ…うあ…や…めなさい……よぉぉ……っっ‼」
前後の穴をいいように弄ばれて。黒衣の魔少女はひくつきながら抗うも、その頬は朱に染まり鋭かった紅眼も潤みきって欲情の色を隠しきれない。

「あらあら、まぁだそんな強がり言っちゃうワケ？」
「ほぉんと。これはテッテーテキに、身の程を思い知らせてあげなくちゃだわねっ♪」
それでも抵抗の姿勢を崩そうとしない魔少女の挑むような紅眼に、淫堕の妖精族どもは加虐心を擽られたようだ。
「ねえ、このシッポすんごく感じちゃうんでしょ？　ンフフ、だったらさぁ……」
レロレロとリリスの尻尾を舐っていたエルフがリリスの陰部を嬲る仲間へと何事か耳打ちする。それを受けたエルフは、それまで膣道を埋めていた指をぬるりっ、と引き抜いた。
「はぁぁうっ……」
抜き取られる瞬間思わずはしたない声を漏らしてしまう。やっと解放されたというのに、昂るだけ昂らされての途中放棄に肉壷は切ない疼きを抑えきれない。
「んふふ、物足りないって顔ね……心配しなくたって、まだまだこれからよ」
エルフは指先に絡んだリリスの愛液を舐め取ると、再び魔少女の陰部へと手を伸ばす。
そして次の瞬間。
くぱぁぁっ♥
「ひゃっ…開かないでよっそんなとこ……やだっ、覗くなっなか見るなぁぁっっ!!」
陰唇の両脇に添えた指に力を込められ、秘裂を割り開かれた。ぱっくりと口を開いた肉洞内部は白く泡立った蜜液が糸を引き、桃色の膣壁はひゅくひゅくと卑猥に蠢いている。

ぐにぃっぐにぃぃぃ……男は姫君のバストの感触を楽しむようにゆっくりと乳肉を揉みしだいた。
「ちょっ、とぉ……そんな、何度もモミモミしたらぁっ…あっ、それ…だめ……」
嫌がる美姫の声色は、その言葉とは裏腹に艶を増し始める。彼女自身、自分が感じているその得体の知れぬ感覚をどう捉えていいのか理解しかねている様子だった。
「へへ、声が可愛くなってきてるじゃねえかよ…今度は直に、可愛がってやるよ」
言うが早いか、男がシルヴィアのシャツに手をかける。そして酷く手馴れた様子でぷちぷちと、ボタンを外して引っ剥がした。
ぷりゅんっ、と踊り出た巨乳が二度三度と柔らかくたわみ、男たちの視線を集める。
「きゃあっ!!　やだっなんで服脱がすのぉっ、触るだけって約束じゃないっ!!」
「服の上からなんて言ってねえじゃねえか……お、でっかい割に先っちょはへっこんでやがるのか」
「おっホントだ、陥没乳首なんざ初めてお眼にかかったぜオレ」
姫の恥部を見つけ出した男たちは好奇の視線で姫君の切れ込みみたいな乳先を射貫く。
「ひゃあっ!!　やだやだっ、見ちゃ駄目ぇっ!!」
あげつらわれて、姫君は今更ながらヒトとは違う自分の恥部を思い出し、陥没気味の乳先を隠そうとする。しかし両腕は簡単に捕らえられて、即座に背後で束ねられてしまう。

それでもなお乳球をぷりゅんぷりゅんと揺さぶり踊り、いやいやをする聖女であったが、
「おいおい、そんなわがまま言ってっと、船を出してやらねえぞ？」
男の一人に意地悪く言われ、う～っ、と唇を尖らせ唸りつつもようやく大人しくなった。
「へへっ、いい子だ……ご褒美にうんと気持ちよくしてやるからな」
拗ねる少女に言いながら、男の指が薄紅色の乳輪を撫でる。淡い外周をなぞるようにさわさわと擽られると、甘い疼きが否応なしに胸の奥へチクリと刺し入る。するとそれを契機に、胸への刺激が痛み以上の気持ちよさへとじわりじわりとシフトした。
「んふぁっ…いっ、やだ……ゆび…そんな……何度もされたらぁ……あぁっ」
ぐにゅりぐにゅりとパン生地でも捏ねるように、男は執拗に乳房を掬い圧搾してくる。乳腺を刺激するような揉み込みに、嫌がりつつも甘い吐息が口を突いた。
「おやおや、顔を真っ赤にしちゃって……感じ始めちゃったのかなぁ？」
「それじゃそろそろ、俺たちも気持ちよくさせてもらおうか」
見ているだけでは飽き足らなくなった海賊たちが口々に言いながら、もどかしげに自らのベルトへと手をかける。
そうして取り出されたペニスが、四方から美姫の眼前へと突き出された。
「ひゃっやだ……な、なにをいきなり見せてるのよっこの無礼者ぉっ!?」
いきなり何本もの牡性器を向けられて、シルヴィアの美貌が引きつった。さすがの少女

もペニスが単なる排泄器官でないことくらいは知っている。
しかし実際見たことがあるのは父王のモノくらい、それもシルヴィアがずっと幼い頃の話だ。そして今自分を取り囲んでいる牡器官は、そんな父のものとは大違いであった。
周囲の男性器はみな天井を高々と仰いでおり、全体的に赤黒い。
大きさは十人十色で小さいものは彼女の指二本分くらいだが、大きいものとなると下手をすれば彼女の手首ほども太く、長さも二の腕くらいはあった。
「ほら、咥えてくれよ」
ぐいっと腰を突き出し言ったのは、一番の巨根を誇る男であった。張り出した亀頭が鼻先にまで突きつけられて、ツンッとした酢酸臭が鼻を突く。
「んぷ……く、臭いぃっ、こ、こんなの咥えるなんて……馬鹿も休み休み言いなさいよ!!」
男の無理な要求に、顔を背け拒絶するシルヴィア。しかし周りの男たちが、それを許すはずもない。
「お口じゃしてくれねえってか……じゃあ仕方ねえ。代わりにこのデカ乳、いただくぜ」
言って男は腰を下げ、自らのモノに手をあてがうと、その先端をシルヴィアの豊満な乳釣鐘へと向けた。
赤い亀頭の先端が乳先へと触れる。触れた牡槍は乳粘膜が火傷(やけど)しそうなほど熱い。刺激に身を退こうとするが、背後から抱きすくめられていてそれもできない。

「な、なによ…なにをする気……？」
新たなる恥辱の予感とチクチクとした胸への刺激に打ち震えながら美姫が問う。
男は言葉ではなく、行動でもってその疑問に答えた。
ずぶぅっ……!!
「きゃああぁっ!?　なっおっぱいになにしてんのよばかあっ!?」
自分の胸へと仕向けられた信じがたい仕打ちに、シルヴィアは素っ頓狂な悲鳴をあげる。あろうことか男はそのまま腰を突き出し、巨根を巨乳深くへ埋めたのである。
乳肉深くまで届いた肉根のゴリゴリとした感触とそれが孕んだ凄まじい熱気に、呼吸は止まりかけ息が詰まりそうになった。
「セックスは嫌、おしゃぶりも駄目ってんならおっぱいで楽しませてもらうしかねえからな……へへへ、もちもちしててあったかくってこりゃ下手な女抱くよりよっぽどいいぜ」
乳姦の男は呆け顔で言いながら、ぐいぐいと小刻みに腰を振り始める。押し込まれたことでわずかに開いた乳頭の切れ込みに、亀頭の先が食い込んで勃起乳首を責め苛んだ。
「ひんっ!?　やっ、おっぱいそんな…あっ、あんっ……」
ヒトよりずっと敏感な乳突起を陥没したまま責め立てられて、胸の奥でのズキズキが加速度的に鋭さを増した。
乳先だけではない。乳房全体が敏感さを増し、牡の硬い陰毛が乳肌を刺すのさえ次第に

異様なくすぐったさを伴い始める。
「それじゃオレッちはこっちのおっぱいをいただくとするぜ」
むにぃっ。空いた左胸にも同様にペニスが突き入れられる。こちらは右に比べてかなり小ぶりな肉竿だ。しかしそのおかげで肉槍の先が陥没乳首を鋭く捕らえ、鈴口が乳先をぐりぐりと捏ねくり回してくる。
「ひゃめぇっ、そっれ…あぅんっ、うっ…んんぁ……あ…ぁうっ……」
鋭い悲鳴と甘い吐息が交互に口を突く。ペニスを突き入れられた乳房は杵(きね)に搗(つ)かれる餅のように、たっぷんたっぷんと弾力豊かに跳ね踊り甘酸っぱい汗の匂いを振り撒いた。
(やだ、わたくし……おちんちんでおっぱい恥ずかしいことされてるのに……ヘンな気分になってきちゃった……)
妖しい行為で感じ始めた自分を恥じ入るも、男に腰を使われると左右の乳房で快感がかんしゃく玉みたいに破裂する。
「うっ…もう出ちまう……」
右胸を犯していた男が呻くように言い放ち、突然腰振りが激しさを増す。打ちつけられる爆乳がたぷたぷと大きく波打ち、全身へと広がる乳悦の波紋に美姫の頬が緩みだす。
そして。
びゅくっびゅっびゅっびゅるぅぅぅっ!!

突き入れられたペニスが暴発し、白濁が一気に弾けた。
「ひゃ、あつぅっ⁉　んっひぃぃ……ひんっ、んあ…あぁぁぁ……」
力強い射精に敏感乳首を狙い撃ちされて、蕩けたような喘ぎ声が聖女の喉を迸る。
（なっ、なにこれ…なにこれぇぇ……⁉）
ペニスとはまた違う、マグマのような熱くてドロリとした感触が乳肌へと染み入ってくる。ねっとりと粘り気に満ちたそれは乳突起にまで絡みつき、かつてないほどの恍惚を美姫にもたらした。
「ふぅー、射精た射精た……こりゃ胸だけでも相当楽しめるぜ」
ぬぷぅっ……放精を終えた男が巨根を引き抜く。ねっとりとした白濁汁が乳房とペニスの間に糸を引き、ムッとするような青臭い牡の臭いが聖女の鼻腔を掠めた。
「よっしゃ、じゃあ次は俺だな」
ぐにゅりゅぃぃ……。
射精を浴びてヒリヒリとする乳房目掛けて、新たな男がペニスで貫く。
「あんぅっ……やだっ、まだおっぱい…するの……？」
乳射精を受けた美姫はすっかり弱々しくなっていた。乳首をくじられ巨乳を捏ねられながら、怯えるような上目遣いで男たちを見回しつつ眉を八の字に寄せそう問いかける。
「まだまだ始まったばかりじゃねえかよ……みんなでたっぷり姫様のおっぱい可愛がって

やるぜ」

しおらしくなってきた姫君に、しかし男は残酷に言い放った。

「そ、そんなぁぁ……こんなの続けられたら、わたくしぃぃ……」

胸は未だかつて感じたことのないほど敏感にされている。立ち上る胸を焼くような精液の臭いに肺を満たされ、心臓の鼓動がどんどん速くなってゆく。

早く終わらせたい。そうしないと、自分が自分でなくなる気がして無性に怖かった。

「それじゃおっぱいだけじゃなく、口も使って射精させるんだな。そうすりゃ胸で相手する数がぐーんと減るぜ？」

背後から乳揉みを続ける男が耳元にそう囁く。くすぐったさに肩を竦めながら、シルヴィアはしばし眉をひそめて思案していたが。

「うぅっ……する…お口でも、するぅ……」

か細い声でそう呟き、控える男を促すようにその股間へと眼をやった。

「ラッキー♪　それじゃ姫様、たっぷり味わってくださいよっ、と」

男は剥き身のペニスを揺らせてそれを少女の鼻先へと近づける。さほど大きくないもののその形状はまるで芋虫を連想させる酷くグロテスクなものだった。臭いも酷い。尿と汗とを布に染み込ませ、生魚を包んで半月ぐらい放置したらこんな臭いになるだろうか。

（やだ、こればっちい……だけどお口だったら…ヘンな気分にならないですむもの）

これ以上胸を弄られ続けたら、ホントにおかしくなってしまう。そう思い、断腸の思いでシルヴィアは目の前に差し出された男のモノへと顔を近づける。強烈な臭いがツンと鼻を突き、口の中に酸っぱい唾液が湧き上がる。

（お父様のためだもの……わたくしが、ぜったいみんなを助けるんだもの……!!）

そう何度も自分に言い聞かせ、目の前で悪臭を放つ肉芋虫への嫌悪感を打ち払う。

んあっ、と大きく口を開け、反対に瞳は硬く閉ざして美姫は男の股間へと顔を近づけた。

「あ…むぅっ……んおぁっ……ふくっ……うぐぅ」

下唇に触れる熱気、それを追いかけるようにして、シルヴィアは意を決し肉筒を咥えた。そして途端に顔を顰(しか)める。イヤな甘さと塩辛さが同時に舌の上へと広がる。鼻先を掠める陰毛から立ち上るムッとするような汗の臭いに、今にもえずいてしまいそうだ。

「よし、そのまま口を窄めて、首を前後させてチンポを扱くんだ。歯が当たんねえように気をつけながらな」

命令を受けたシルヴィア姫は苦々しい表情を浮かべたものの、

「……ふぁっ、ふぁかり…まふぃひゃぁ……」

隷属の言葉と共に言われた通り唇を閉ざし、咥えた肉根をゆるゆると扱き始める。途端に肉棒がビクンッと跳ねて、口の中いっぱいにえぐい苦味が広がった。

「へへ、お上手じゃねえか……しかしすげえな。オレ今、あのシルヴィア姫様にフェラさ

せてんだぜ……」

大陸随一の美姫と謳われた美貌が己の股間に吸い付くのを見下ろし、男が上ずった声で笑った。対する少女はただただ必死に咥えたペニスをしゃぶり続ける。男性器にこびりついた汚物の溶けた唾液など絶対飲みたくないので、口端からだらだら唾液を垂れ流しながら一心不乱に首を動かす。

「くっ、こんな可愛い姫様にチンポしゃぶられてたら…も、もう射精る……!!」

口腔奉仕を強いる男がブルッとその身を震わせて、シルヴィアの頭を抱え込み、一思いに喉元まで刺し貫く。そしてそのまま喉奥目掛け、一気に精を放った。

どくんっどくんっどくんっ……!!

「んぐ……んごきゅっ、ごきゅぅ……んごぉっ!?」

逃げようにも大の男の力で後頭部をがっしりと押さえ込まれては、どうすることもできない。食道まで届いたペニスは巨大なミミズみたいにのたくりながらビュクビュクと精を吐き出し、気管から胃袋までを白濁液で塗り潰す。

「んごっ、んぐぉぁ……ごほぉっ!!　きゃふっ、げほっけほっ……ごほんっ!!」

強引に精液を飲み干させられ、男が一段落ついたところでようやく解放された。それでもしばらくの間、気管に入った子種汁のせいでまともに呼吸もできずひたすら咳き込み続けるシルヴィア。その口元からはザーメンと胃液の混合液が、まるで牛の唾液みたいにだ

らりと糸を引いた。
「けほぉっ…はぁっ、はぁっ……な、なにするのよぉ、全部飲んじゃったじゃないの!!」
それでもようやっと息を整えて、口元の白濁を拭いつつ半べそをかいて抗議するも、
「なんだ、俺たちのは飲みたくないってのか……へへ、それじゃこれから射精されたザーメンは、一滴残さず飲み干せよ。全員のザーメン残さず飲まなきゃ船は出してやらねえ」
「なによそれぇっ!!　全然ハナシが違うじゃないのぉっ!!」
男の理不尽な要求に、可愛らしい碧眼を吊り上げ声を荒げるシルヴィア。しかしそんな怒り顔も、紅潮した頬と緩んだ唇から垂れる精液のせいで形無しだった。
「いやならここでやめてもいいぜ、姫様はヤラれ損だけどな」
対する男たちは悠然と言い放つ。そう言い返されては少女には、抗いようもなかった。他に海を渡る術はないし、既に泥沼に片足突っ込んでいるのだ。
「うう…こんなの、ずるいわよぉぉ……」
スンスン鼻を鳴らしながら、それでもシルヴィアは待ち構えていた勃起へと自ら進んで顔を近づける。泣いていたって、お城の中みたいに助けてくれる人はいないのだ。
今はとにかくさっさと男たちを満足させて、船を出してもらわなくてはならない。シルヴィアは無我夢中でペニスをしゃぶり、乳房を揺さぶり男相手の奉仕を繰り返す。
「んっ…あぁっんっ……ふぁむっ、あむぅっ……」

乳房への刺激と激しい前後運動に、次第に身体が熱を帯びる。そうしているうちに吐き気を催したあの臭いもだんだん気にならなくなってきた。それどころか呼吸をするたび頭の芯がジンッと痺れるような感じがして、酩酊にも似た心地よさを覚え始める。

（このおちんちんから出てきた白いやつ…臭い嗅ぐと、胸がドキドキしてきちゃう……どうしちゃったの、わたくし……？）

それまでおぞましさしか感じなかった精液の臭いにさえ、不快感が消えていた。シルヴィアは無意識に肉筒へと舌を絡ませ、ストローでシロップを飲むようにチュウチュウと男根を啜り始める。

淫らな姫の姿に、それまで順番待ちをしていた男たちもこぞってシルヴィアの肢体へとその手を這わせ始めた。

脇の下に顔を突っ込まれ、汗の匂いを嗅ぎまわられる。無毛の脇をねっとりと舐められながらわき腹を愛撫され、ぷにぷにした二の腕をむにむにと揉みしだかれた。

たっぷりとした桃尻や肉付きのいい太股にも大量の掌がクモのように群がり、特に敏感な内股へはねちっこい往復運動での愛撫が施された。

身体中を愛撫されながら、股間だけには誰一人触ってこようとはしない。シルヴィアはそれを約束を守ってくれているからだと理解していたが、無論そんな甘い理由ではない。

そしてそのことを、姫君もすぐさま思い知らされることとなった。

（やだぁ……お股が、じんじんっていって…とまんない……なに、これぇぇ……）

身体中への愛撫にそこはじくじくと蜜を滲ませているのに。一向に刺激を与えられない陰唇は駄々をこねるように痺れ、膣道は見たこともないその形状がわかるくらい淫らに蠕動している。

（もしかしてこれが、エッチな気分になるってことなの……？　ううん、うそ。好きな人でもないのに、そんな風になるわけない……だけど、やっぱりお股、熱いぃぃっ……）

男と女の営みは知識としては知っているものの、愛してもいない相手に嬲られて性的な快感を得るはずがないと堅く信じているシルヴィアは、自分の身体が示す浅ましい反応に気が動転していた。

しかし彼女の思いとは裏腹に子宮は火の玉でも孕んだみたいにとにかく熱く燃え盛り、心臓の鼓動に合わせてズキズキと疼き鳴いた。

「ふぅっ、そろそろ射精すぞ……ううっ!!」

ビュクッビュクンビュクンビュビュビュゥゥゥッッッ!!

左乳を犯していた肉竿が果て、またもおびただしい量の白濁液が弾けた。

「ひゃはぁっ、あああんんぅっっ!!」

射精に乳突起を撃ち抜かれ、息が止まるほどの鋭い乳悦が突き抜ける。

「ほれ、約束だぜ……オレッちのザーメン残さず舐め取ってくれよな」

乳山から竿を引き抜いた男に急かされて、シルヴィアは自分の乳房を持ち上げる。そしてそこにぶちまけられた黄ばみがかった精液を、舌でぺろぺろ舐め取り始めた。
（やだ、おっぱいにおとこのひとのがたくさん……。生臭いけど、これ…あんまりイヤじゃなくなってきた……それどころかなんか、なんかこれ……おいしい、かも……）
精液への嫌悪感が薄らいだことで、少女の舌掃除は積極的なものへと変わった。陥没乳首に注ぎ込まれた精液を味わうべく、乳輪を含み、チュウッと啜る。舌を捻じ込み乳勃起を捕らえ、吸い上げながら絡みつく子種を舐め取った。反対側の乳首も同様に舐めしゃぶり、溜め込んでいた精液をじゅるじゅると啜り飲む。
「はあっ、はあぁっ…じゅるぅ……んっふぅっ♥」
両の乳峰を掃除し終えた頃には、身体は牡と子種への飢餓感で恐ろしく熱を帯びていた。精液の臭いと味に牝の本能を刺激されたのか下腹部はますますうずうずとはしたなく疼き狂い、シルヴィアは始終空腰を使っていなくては耐えられないほど発情しきっていた。
（やだぁっ身体あついぃっ……このままでなんて、いられないわよぉぉっ!!）
「うう……もうだめぇ…これ以上はもうやだっやなのぉぉ……助けて、助けてよォォ」
姫君の懇願に、男たちが邪悪に笑う。
「じゃあさ…ヤらせてくれよ。姫様だってここ、ずうっと疼きっぱなしなんだろ？」
くちゅくちゅ……濡れた股間をようやく摩擦され、瞬く喜悦に巨桃がびくんと跳ねる。

「きゃあああっ⁉　いやっそれ敏感すぎ…ひっひいいいぃんっっ⁉」
生まれたてのペニス、その最も過敏な部分を撫でられて、ツインテールをめちゃくちゃに振り乱しながらリリスは獣じみた悲鳴をあげる。
「ほおらまたお腰が元気に動き始めた♥　せいぜい頑張ってどこに出しても恥ずかしい、おチンポ狂いにおなりなさい♪」
タバルサは扱く手に加えて乳峰を弄っていた掌で亀頭を覆い、五指を巧みに蠢かせて敏感亀頭を苛め抜く。
（もう、ダメぇ……おちんちんイきたい、イきたいイきたいいきたいいきたいィッッ‼）
「ひあああぁうっ、いやぁっ、もうイヤアアッッッ‼　ださせてっ射精させてよおっ、おちんちん早く楽にさせてええええええっっっ‼」
強情を貫いていた魔少女も、際限なき寸止め地獄の前にとうとう淫魔に慈悲を乞う。
「うふふ、ようやく素直になりましたわね、リリス姫。大魔王様、こちらは準備が整いましたわよ」
それでもにゅちにゅちとペニスを扱き続けながら、タバルサは主君に声をかけた。
「そうか、こっちの方もだいぶ大人しくなったよ。そのくせほら……お尻の穴はこんなにギュウギュウ締め付けて、ボクのモノを離さないんだ」
言って魔王はそれまで獣の姿勢で尻を犯していたシルヴィアを抱きかかえた。そして尻

で繋がったまま、女児に大人が小用を足させる時みたいに膝を抱えて玉座へと戻る。
「ひっ…んんぃぃあ……」
股間を大きく露出させられながら、シルヴィアは大した反応も見せない。長く続けられた肛辱のショックとその間に幾度も迎えさせられた尻絶頂の余韻から、未だ醒めていないらしい。
美姫の桃穴は魔王が罵った通り彼の陰茎を根元まで頬張り、捲れ上がった桃粘膜が卑猥にピクピク痙攣している。
しかし魔少女の紅眼は淫らに交わる肛門にも目をくれず、その上に息づく聖女の秘部に釘付けとなっていた。完璧な左右対称を形作る美しい肉の花弁。未だ手付かずの乙女の花園。呼吸に合わせてひくっひくっと息をしている陰唇は、明らかに濡れていた。
うっすらと立ち上る乙女の匂い、少し鼻を突くアンモニア臭……そのすべてが、魔少女の陰茎を激しく脈打たせた。
「可愛いわよね……どう、犯したいでしょう？　めちゃくちゃにしてやりたいでしょう？泣き喚くその顔を見ながら、子宮にたっぷりとザーメンをぶちまけたいでしょう？」
美姫の女陰を食い入るように見つめる魔姫を、女淫魔が淫らな妄想で誘惑する。
「う、あ……ちっ、ちがうっ！　あたしそんなこと、望んで…ないっ!!」
心の中を見透かされたリリスは慌てて視線を逸らすが、

「違わないわ。そのおちんちんね、女の子の膣内でなら射精できるようになってるの。あの子の膣内なら、ドピュドピュッていっぱいいっぱい射精できるわよぉ？　射精したいんでしょ？　あの子のこと、好きなんでしょ？　ならしちゃいなさいよ、自分のものに……力ずくでね。大魔王様からの、せっかくのお計らいなのよぉ？」

ぎゅううっ。ペニスを握られ囁かれて、狂おしい射精欲にビクンとその身を跳ねさせる。

「ひんぐぅぅっ……だ、だけど…シルヴィアはっ、シルヴィアはまだ……」

男を知らないはずだ。そんな彼女の初体験を、忌まわしい記憶に変えるのはあまりにもむごい。自分がそうだったリリスは、美姫への思いやりによって一瞬肉欲を押しとどめる。

だが、悪魔たちがそんな甘い感傷を呑むはずがなかった。

「なあんだ、リリスはいらないのかあ。せっかく可愛い娘にとっておいてあげたのに。それじゃやっぱり、ボクがもらっちゃおうかな」

大仰にそう言って、魔王は聖女の美肛から剛直を抜き取る。桃汁にまみれぬらつく怒張は未だ硬く反り返っている。禍々しい肉槍が狙うのは、無論シルヴィアの処女園だ。

貞操の危機を前にしても、肛辱に晒された姫君は力なく虚ろな碧眼で虚空を見ていた。

（このままじゃ、シルヴィアを奪られる……!!）

「だ、だめええっ!!」

慌ててあらん限りの大声で、魔王を制止する。その声に、悪魔は不気味に笑った。

「ん～？　リリスはいらないんじゃなかったのかな？　だって特別に想っているんだろう、この新しい聖女のことを。いいのかい、そんな大切な娘を自分の手で汚しちゃって？」
反り返る肉竿で聖女の陰唇をくちゃくちゃと摩擦しながら、魔王は娘を問い詰める。
「う…あぅっ……でも…でもおぉっっ……」
どのみちこのまま放っておいたら、シルヴィアの貞操は彼によって奪われるだろう。
だったら、いっそ……。
「する……お前がするんだったら…代わりに…あっ、あたしが……するぅっ」
（シルヴィアだって、コイツに奪われるくらいだったらあたしの方がいいに決まってる）
ペニスの疼きに思考能力を奪われた魔少女は、自分の行為を正当化しようと無理な理屈をひねり出し、牡快楽でがくがく震える膝を叱りつけ一歩一歩姫君へと近づく。
そしてはやる気持ちを抑えつつ自らペニスに手を添えて、肉花弁へと先端を押しやる。ねっとりとした感触と、じゅわりと亀頭が焼けそうなほどの熱さに陰茎が歓喜した。
「あはっ、熱いぃっ……んっ……あっんんぅぅっ♥」
ずぶっ、ずぶずずぅぅぅぅぅ!!
「ひぐうぅぅっ!!」
ペニスが処女園へと突き立てられる肉音と、聖女の悲鳴が重なった。肉槍は一気に子宮まで穿ち、途中膜の裂けるぷつんという音を、リリスとシルヴィアの性器が同時に聞いた。

「ふぇぐうぅ……う…え…リリス……？」
処女喪失の痛みによってようやく自分を取り戻したシルヴィアは、その痛みを生じさせている原因が他ならぬリリスであると気づいたようだ。
「そ、そう、あたし……だからシルヴィア、安心して……」
ねっとりとした膣肉の感触に息を上がらせながらも、精一杯シルヴィアを気遣って優しい声でそう諭す――しかし。
「いやあっ!! なんで…やだっリリスどうしてっ!? いやっやめてっやめてえぇっっ!!」
魔少女を待っていたのは、あらん限りの拒絶だった。犯されている、その事実にシルヴィアはパニックに陥り、四肢をバタつかせ大声で泣き喚く。
「ち、違うのシルヴィア、こうしなくっちゃ魔王がアンタを……」
慌てて弁明しようとするものの、一旦抽迭を始めた腰振りは彼女自身もう止めることができない。薄紅の怒張は姫貝のような処女膣をえぐり、硬く閉ざした肉洞をこじ開ける。
「ふぎゃうっ…お願い…やめっひゃめてリリスぅっ……なんでっ、なんでこんなことするのぉぉっ……痛いのっ、抜いてよぉ…お願いだからもう抜いてぇぇっっ……!!」
錯乱状態のシルヴィアには、リリスの言葉が届いていない。破瓜の激痛に涙を流し、聖女は肩を震わせひたすら懇願する。
「ねえ聞いてよシルヴィアっ、お願いあたしの話を聞いてっ、ねえっ、ねえぇぇっ!?」

どんな大声で呼びかけても美姫は応えてくれない。彼女が反応するのは、股間を串刺すペニスのもたらす刺激だけだ。しかもその時漏れ出す声は、苦痛に満ちたものだった。

（どうしよう…あたし助けるつもりだったシルヴィアのこと、反対に傷つけてる……!!）

苦悶するシルヴィアの姿。それは彼女と交わる口実が、自分を欺くための体のいいこじつけだったことが隠しようもなく暴かれた瞬間でもあった。

「あっはっは、まさか本当にヤッちゃうとはなぁ!!　ボクに抱かれるのがイヤだからといって、お前ならいいって道理はないだろう？　それとも、その聖女なら自分を受け入れてくれるとでも思っていたのかい？　お前を捨てた、ママの血を引く尻軽女だからかぁ？」

「そんなのどうせ単なる建前、本音はおちんちんピュッピュって射精したいだけですわ。その証拠にほら、お尻はピクピク動いて小刻みに腰を振ってらっしゃるじゃないですか」

魔王が高笑いをあげ、女淫魔がそれに追従する。自分がまんまと彼らの奸計に落ちたことを悟りながら、リリスは絶望の叫びをあげた。

「違うううっ！　あたしっ、あたしは……あたしはあぁぁっっっ!!」

（シルヴィアを助けたいと思ったから、そうだから……けどこれ、気持ち…いい……!!）

二人の悪魔の言葉を退けるようにツインテールを振り乱すも、その腰はタバルサの指摘通り、ぐいぐいと前後に蠢いて処女壷目掛け魔根を突き立てていた。

「お願い、リリス……痛いの、抜いて…もう抜いてぇぇ……」

処女地を荒らされ続ける美姫は、すがり泣くように魔少女相手に懇願する。
「ごめんね、シルヴィアごめん……すぐ、すぐ抜くから……」
まだ間に合う、どうにか腰を引き、ペニスを甘いぬかるみから抜き取ろうとする。しかしカリ首が膣襞に摩擦されると桃色の疼痛が亀頭で弾け、堪らず腰を迫り出してしまう。
「ひうぅんんっ！　うそつきぃっ、抜いてくれるって言ったじゃないのぉぉ……」
亀頭が膣奥をえぐり、コリッとした感触が肉筒を甘く痺れさせる。しかし子宮を打たれたシルヴィアは魔少女の裏切りにますます泣きじゃくった。
「ああっ違うのシルヴィア、今度こそちゃんと抜くっ、本当に抜いてあげるからぁ……」
しかし焦れば焦るほど、焦燥感が集って牡の本能を刺激し、なにがなんでも子種を植えつけようと女陰を突く腰を強引なまでに後押しした。
（うあぁっとまらないっ…やだっとまれ、とまれぇぇっ……!!）
下半身を欲望によっていいように踊らされながら、腰を一突きするごとに魔少女の胸は絶望によって黒く塗り潰されてゆく。
（お願いだからとまってよぉっ、これ以上したらシルヴィアに……嫌われちゃうッ!!）
シルヴィアにだけは嫌われたくなかった。目の前の少女はリリスにとって、魔王に抗う最後の希望だったから。それは聖剣を振るう聖女として、だけではない。
四六時中一緒にやってきたシルヴィアだったら、魔族だという偏見も捨てて自分を受け

入れてくれるかもしれない――そんな淡い希望をリリスは抱いていたのだ。なのに……。
「ふひぃぃんっっ…リリス、さっきからぁっ…うそっ、ばっかりぃぃ……やっぱり、本当はわたくしにぃっ、いやらしいことしたかったの……!?」
なのに。そんな魔少女の胸のうちを知らないシルヴィアは、際限なく膣道をえぐられながら、碧い瞳でリリスを睨み力いっぱい非難の声をあげた。
「そ、そんな……!?　ちがっ…あんっ…違うの、ちがうんだってばぁっ……」
どうにかして言い繕いたいのに、腰は見えない綱で引かれているかのようにぐいっぐいっと持ち上がり、ぬかるみ深くへ剛直を挿し続けてしまう。牡器官が伝えてくる膣肉の熱さに、否定の言葉とは裏腹に甘い喘ぎが口を突いた。
「ひんぁっ…、ひどいっ…もういやぁっ、こんなのいやっ嫌いっ大っキライぃっ!!」
半狂乱になって叫んだ美姫のその言葉が、魔少女の胸を鋭くえぐる。
「やだ…嫌わないでよ、お願いだからそんなこと言わないでぇっ!!」
聖女の拒絶にかつて母に見捨てられたことを思い出し、涙声でリリスが叫ぶ。広がる動揺に抑止を忘れ、一層強くズクズクと抜き差ししてしまう。
「きゃぁうっ、いやぁっあっ…ひっんぅうっ……」
金切り声で叫ぶ美姫、しかし同時にその声色は、明らかに艶を帯び始めていた。
（あ…れ……もしかして…し、シルヴィアも……感じてるんじゃ？）

降って湧いた疑念。しかしその邪念は乱れる聖女を見ているうちに、黒い雨雲みたいにムクムクと膨れ上がってくる。

（だったら、もしそうなんだったら……あたし、我慢する必要なんて……あるの？）

ぬぶっ、ずぬぅっ……。

今度は自分の意思で、ゆっくりと腰を一往復してみる。陰茎の先端から根元までを狂おしいほどの快美感が突き抜け、腰骨が蕩けそうなほど心地よい。

「はうぁん……ひど…い……も、やめて……う…ふぁぁ……」

なおも嫌がる聖女だが、その膣肉は淫らにうねってペニスに絡みついてくるのがはっきりとわかる。

（ほらみなさいよ……やっぱり、アンタだって感じてるんじゃないのよ……!!）

「口ではイヤだって言ってるけど、ホントは気持ちいいんでしょ？　初めてのくせにそんなに感じてるわけ？　それでなにがイヤ、よ……相手があたしだから、イヤってこと？　そうよねぇ、どうせアンタだってあたしのこと、都合よく利用してただけなんでしょ!?」

心を許していたその反動で、美姫への想いは一気に黒く塗り潰されてゆく。裏切られる恐怖に堪えきれない魔少女の弱さが、彼女を進んで裏切り者へと仕立て上げる。牡欲もそれを後押しし、リリスは目の前の聖女を汚したいというどす黒い欲望に囚われつつあった。

「んひぁぅっ…いっ、いったい……なに…っひゃぁっ…言ってぇぇ……り、リリス!?」

魔少女の言葉に驚いたシルヴィアは碧眼を紅い瞳に向け、更に驚愕する。
ツインテールの魔姫は聖女を犯しながら、同時に泣いていた。
（どうせもう後戻りできないんだ……だったら……もう、どうなったっていいじゃない）
魔王の支配するここ以外に、やっぱり自分の行き場所はなかった。
それでもシルヴィアだけは違う、そう思っていたのに。信じていたのに。
やっぱり彼女も皆とおんなじだ。魔族である自分のことなど、信じてくれやしないんだ。
「アンタがあたしを嫌いなんだったら、あたしもアンタを嫌ってやる…壊してやるッ!!」
ずくんっ!!　ずぶっ、ずぶっ、ぬぶっ、ずぬぶっ、にゅぷぅっ!!
刹那的な快楽に流された魔少女は獣みたいに激しく腰を使いだす。
「ひぁあっり、リリスッ!?　ひゃめっ、はぁんっ、んっ、んっ……ど…うしてぇぇ……」
喘ぎ混じりの美姫の問いかけにも答えず、リリスはひたすら処女肉を蹂躙してゆく。
「へえ、やるじゃないかリリス…それじゃボクも」
にゅぎゅうっ！　魔王が再び聖女の肛門を貫いた。
「んひゃあっ、いやっ今お尻いやぁあっ!!」
前後の孔を同時に責め立てられて、シルヴィアは壊れたような声をあげる。
アナルが穿たれたことで膣道もギュッギュと更にきつくなる。リリスの射精の予感は確信へと変わり、抽迭は子宮を叩き潰さんばかりに苛烈さを極めた。

「ふぁっ、イクぅ……シルヴィア…シルヴィアぁぁ……ううっ、アンタなんかもう知らない。射精してやる……アンタなんか、めちゃくちゃに汚してやるんだからぁっ!!」
リリスは聖女を睨みつけ、はあはあと犬のように荒い息を吐きながら、パンパンパンッ、と三度一際激しく腰を打ちつけるや美姫の子宮目掛けて力いっぱい射精した。
ビュルビュッビュッビュビュビュウウ――――――――ッッッ!!
溜めに溜め込んだ精液はその濃度も量も勢いまでもが段違い。射精の間中、さながら尿道から固形物を吐き出しているかのような感覚だった。
「ひあああっだめっ、なかっあかちゃ…んひぃいっいっイクッイクうううっっっっ!!」
妊娠の恐怖に怯えながらも、濃厚精液に子宮口をぶち抜かれたシルヴィアもまた否応なく絶頂を迎えさせられる。
「お尻も一段と凄い締め付けだ……ほぉらこっちにも、たっぷり射精してあげるよ!!」
ドビュブッ！　ビュクッビュクビュリュビュビュウウッッ!!
続けざまにアナルへも、こちらはもう何度目かわからぬ子種汁がぶちまけられる。
「んんひいいぃぃ……いやぁうっ今イッてるっイッてるのにぃぃ……まっまたっイクぅぅうう!!」
膣内射精で果てているところに尻でも更に絶頂させられて。聖女は度重なる快感に眼を見開き舌を突き出して、ビクビクビクッとその豊満な肉体を激しく痙攣させ続けた。

すべてを終えた後、息を整えた魔少女がまずシルヴィアの下を離れ、続いて魔王が美肛から剛直を抜いた。そして抱え込んでいた聖女の身体をどさりとその場へと転がせる。

「ふぁっ……う、うう……」

未だ連続絶頂の余韻に囚われながらも、聖女がゆっくりと碧眼を開く。そこにはちょうどこちらを見下ろすようにして立つ魔少女がおり、その紅い瞳と眼が合った。一度射精したためか淫魔の呪いは消え、少女の股間は元のつるりとした恥丘に戻っていた。

「リリス……どうして……？」

欲望のためだけに汚された聖女は腰が抜けてしまったのか、生まれたての仔鹿みたいに体液にまみれ立ち上がることもできない様子だ。赤絨毯の上で仰向けに倒れながら、それでも追いすがるようにリリスへ向けて手を伸ばす。

しかし魔少女はそれには応えず、転がるシルヴィアを冷たい瞳で見下ろし続けていた。

「さよなら、聖女様」

――やがて感情のない声で一言そう言い残した黒衣の魔姫は、ツインテールを揺らし踵を返して、その先で待つ魔王の腕の中へと融けるようにして消え去った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

2010 6月下旬 発売予定!!

不死の吸血姫がドSのご主人様を募集しているようです

［小説：酒井仁／挿絵：にの子］

ご主人サマ募集中!!

「当方Mドレイ希望」

魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

全国書店で好評発売中

魔海少女ルルイエ・ルル

［小説：羽沢向一／挿絵：ピエ～ル☆よしお］

「魔法の天使ルルイエ・ルル!
地球の未来はルルにおまかせよっ★」

借金お嬢クリス3

令嬢はいかにして42兆円を返済したか?

［小説：筑摩十幸／挿絵：マ藤誠仁］

2010 6月下旬 発売予定!!

クリス、悪魔堕ち!?

「愛するジグレット様のため、死んでもらいますわっ!」

既刊LINEUP 全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガッ!! ①～③
- 悪毒開なアダム ①～②
- 絢爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
- 借金お嬢クリス ①～②
- プリンセスリバース!! 交錯する英姫と魔姫
- BLANGEL 輪になって踊る愚者の夜
- 無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- ビルグリムメイデン ①～②
- 呪泪喰らい師【カースイーター】

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7コトドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！
第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園――西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!!　平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで――!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 弐
北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾〈美姫〉景虎、宇佐美〈奈々〉定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!!　敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

借金お嬢クリス
42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円！　クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに！　果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス2
42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!?　水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍（?）に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 参
信玄、出陣！

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

BLANGEL
輪になりて踊る愚者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●夜士郎
原作・挿絵●渡瀬行人

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田睦月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！　ごく普通な少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する!

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

思春期なアダム2 背後をねらう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、睦月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！“蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、睦月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト http://ktcom.jp/

title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』 トキサナ

『ドSの流儀』 chaccu

『生徒会長前哨戦?』 天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中!

※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!